



## 馬 耳 東 風

雪にはいろんな神秘が付きまとい、人の能力を遥かに超えたさまざまな現象が引き起こる。生きるものに厳しい現実があるがロマンを感じ、やがて民話となって語られたりする。小泉八雲はこよなく日本人の精神の美しさを礼讃し出雲を愛し、日本民族の揺籃と称した。民間説話を収めた彼の著、「怪談」の短編集「雪女」はあまりにも有名である。各地に伝説があるが、八雲の「雪女」は武蔵の国という書き出しである。ほぼ十年前に「雪女かかわりの地」碑がなんと東京の水瓶、奥多摩湖の下流青梅市の調布橋北袂の小さな公園に建てられた。一昨年<sup>みつけさん</sup>の大雪で70cmが観測され、近くの御岳山では1mを超えた場所だ。絶景の多摩川は、不気味に深く流れも速い。よくテレビのサスペンス画面に登場するが、夏でも冷たく泳ぐどころではない。有名な御岳溪谷は、険しい流れを物ともせずカヌーを操る愛好家の姿が壮快だ。東京に住む八雲が、調布村から手伝いの父と娘さんを雇っており、二人から彼の地に伝わる「雪女」の話を聞いたのだという。関東の山沿いは、今でも雪の季節にはかなりの積雪があり難渋する。この地の雪は湿った雪で重い。ふぶくことは少なく静かにしんしんと降り積もる。民話が語る木こりの親子の姿といい、舟の渡し守の小屋といい、奥多摩を愛した川合玉堂画伯が墨線と彩色で描く雪景が、まさに民話の地そのものに映る。青梅は作家の吉川英治も構想を練った地だ。八雲は、民話を文学に昇華させ世界へ紹介した先駆者として広く知られている。

関東の雪は湿っていて重く溶けやすい。積雪量の多い牡丹雪の片付けは、手掃きによることが多く実に大変で、市街地では捨て場に右往左往する。首都圏では、雪の備えは乏しい。屋根に雪止めはあっても雪降ろしは見えない。一度雪が積もると交通への影響が大きい。翌朝のアイスバーンが危険だ。首都圏の車も、スノータイヤの備えが増えた。バスはチェーンを履いてゆっくり走る。

さて、豪雪時に新幹線「こまち」で秋田を訪れる機会があった。猛吹雪と積雪で雪を押し分け掃き除け雪煙をあけて走り、車輪は雪に埋もれ線路が見えない。雪原を走破する勇姿はさすがに新幹線の力量十分で、見応えがある。見渡す限りの雪の世界は、美と幻想に満ちている。そこに生きる人々に川端康成の「雪国」を連想した。タクシーの運転手さんがワイパーの氷を叩き落として走ってくれた。今朝は気温が氷点下でふぶいて1メートル先も見えず大変でした。この雪をパウダースノーと呼んでいるのですと話してくれた。気象用語の「乾雪」がこれに相当するのだろうか。シベリアから日本海を渡る雪は乾いて細かく軽い。したがって、ふぶくと目の前が見え難く車間を十分確保しながら運転するのだという。信号機も雪対策で縦取り付けた。雪国の自動車は、チェーンをつけずにスタッドレスタイヤを履く。スパイクタイヤが粉じん公害や路面の痛みで問題になった。山沿いや日本海沿岸の高架道は凍てついて滑り易いからとわざわざ避けて走り抜けた。事故車を横目に日常培われた雪との闘いと愛着から風土の味わいを教えて頂いた。

(柏)